アイルランド詩人イェイツと日本（元・10・21）

大浦　幸男（昭9文甲）

ただ今ご紹介に預りました大浦でございます。父の大浦八郎は碁が非常に好きで、上手だったそうですが、私はさっぱり碁はやらないんで、その点では不肖の子でございます。ただ三高からずっと同じ英文学の方は継いでいるわけでございます。

今日は「アイルランドの詩人　イェイツと日本」という題にさせていただきました。イェイツという詩人は最近の方はあまりご存知じゃないようです。時々「キーツですか」と聞かれる。キーツはご承知のように、イギリスの詩人で一八〇〇年頃の人でありますが、イェイツの方はアイルランドの詩人です。年代もちょっと後になりまして、生まれたのが一八六五年、ちょうど慶応元年になります。そして死んだのが一九三九年、昭和十四年、ちょうど第二次大戦の始まるすぐ前でございます。しかし、日本でも明治から大正にかけては、割合イェイツが有名だったんです。と申しますのは、明治の中期以後に、西洋風のロマンティシズムの風潮が日本に来て、非常に新

しい感覚がしたんです。その為に例えば「明星」という詩の雑誌が明治三十年に創刊されています。

イェイツの詩もまた、初期の詩は、明星派と非常によく似ているのであります。従いまして、日本に初めて翻訳されましたのが、「明星」の明治三十八年六月号でございます。その時の訳者は、厨川白村、その後、上田敏も訳しております。それから明治四十四年になりますと、一高の「校友会雑誌」にイェイツの詩が三つ訳されております。それから我々三高の「嶽水会雑誌」にも、大正四年に一篇訳されております。

その訳者は久米みさを、これは実は矢野峰人さん。例の「行春哀歌」の作者の矢野さんのペンネームです。その他、明治、大正期には、割合たくさん訳されております。また明治の末年頃の日本の詩壇にも、かなりの影響を与えております。明治末年から大正にかけての日本の詩壇は白露時代と言います。つまり、エキゾチックな「邪宗門」を書いた北原白秋と、衆徴派詩人として知られていた三木露風の時代でした。三木露風の詩を読んでいますと、イェイツの詩と非常によく似ているのがあるのです。そういうことで、イェイツは昔の日本にはかなりよく知られておったのでございます

ところが、こういった抒情的なローマン詩人としてのイェイツは若い頃のイェイツなのですね。大体三十五歳位まで。イェイツというのは、一生の間にどんどん変っております。最初の頃は非

常にロマンティックな詩人であって、それから中年になりますと、正に現実派の詩人となり、それがまた、老年になりますと、今度は老人は一体どういうふうに生きたらいいのかといったような問題に、非常に関心を持って詩を作っている。ということで、そういう意味では非常にユニークな詩人だと思うんです。そこで、中年になって、現実派の詩人になりますと、イェイツは、先程申しましたように、アイルランドの詩人ですから、アイルランドの当時の現状に関心をもったのです。そこで、二十世紀初頭のアイルランドというのはどういう国であったか、という事を次にお話したいと思います。

大体日本人はアイルランドをイギリスの一部位にしか思っていない人が多いと思うんですが、実はアイルランドというのは民族的にも、宗教的にもイギリスとは非常に違うんです。民族的に申しますと、アイルランド民族は、昔のケルト族の伝統を継いでおります。ケルト族というのは、昔はヨーロッパ全体におったのです。それが、ローマ人がだんだん勢力を持ち出しますと、西の方に追いやられまして、イギリスへ、それからまたアイルランドへ行ったのです。ちょうど数か月前でしたが、NHKの教育放送で、「ケルト族」ということで、約十回程毎週やっておりました。そういったケルト族のなごりがアイルランドには残っているのです。

ケルト族は宗教的には昔はドルイド教で、その後四世紀にキリスト教が伝来したのです。それから言語的にはゲール語で、今でもゲール語を話す土地が多少あります。ゲール語というのは英

語と全然違うんです。それで聞いていてもさっぱり分らんのです。私も、アイルランドの一番西の方の島、アラン島へ行きました時に、パブに行きました。若い人が盛んにしゃべってるのですが、聞いておって全然分らん、そういうのがゲール語なんですね。そういうアイルランドなんですけど、それがイギリスに征服されたのです。十二世紀に。ちょうど七百年程前なんです。それ以後はアイルランドの一番大きな町、ダブリンにイギリスの総督（これはイギリスの貴族です）が居て支配しました。田舎の方でも、地主は大体イギリス人、それが不在地主となり、アイルランド人は小作人となるということで、まさにイギリス人から搾取をされておったのです。

それから宗教的にもアイルランドにはカトリックが多い。イギリスはヘンリー八世以後は英国々教で、プロテスタントなのです。昔は宗教の違いというのは大変なことなのです。日本は宗教的にはリベラルですが、アイルランドの歴史を見ますと、カトリック教徒は非常に迫害され、教職にもつけないし、役人にもなれないという時代があったのです。そこで、七百年間イギリスに支配された間に、アイルランド人は何度も反英の蜂起をするのです。ところが、何しろ貧しくて、国力のない国ですし、一方イギリスは世界一の強国ですから、すぐに鎮定されるのですね。そういう反英蜂起が歴史上何回もあり、その一番最後のが一九一六年にありました。その時にはダブリンの真ん中にある中央郵便局の前でアイルランドの独立宣言をしたのです。約千五百人程蜂起したのですが、イギリスの方は、陸戦隊を上陸させ、忽ち三、四日で平定しました。そして

首謀者十五人がつかまって、二、三週間位で全部銃殺されてしまったのです。

このようにアイルランド人の間には、反英感情が非常に強いのですが、一九一八年に第一次大戦が終りますと、イギリスには植民地開放のムードが起こってきました。例えばインド、カナダ、南ア連邦などが開放されましたが、その時にアイルランドも開放され、独立しました。一九二二年のことです。ただその時の独立でちょっと変っているのは、南と北とに別れたことです。アイルランドというのは、面積は北海道とほぼ同じ位で、人口約四百万です。その五分の四が南の方で、それがアイルランド共和国となったのです。ところが、北の五分の一は北アイルランドということになって、イギリスの方にくっついてしまったのですね。今でもパスポートなどにある「連合王国」(United Kingdom)というのは、イングランド、スコットランド、ウェールズと、北アイルランドなのです。その点、南北分離でも朝鮮とは違います。朝鮮の方は、三十八度線で人為的に分けられましたが、アイルランドの方は、むしろ北アイルランドが彼等の意志によって、イギリス側にくっついたのです。と言いますのは、北アイルランドの方は割合資源もあり、工業が発達しているんです。また、北で経済的な実権を持ってる人は、イギリスから来た人が多い。ですから、中流以上はイギリス系が多いのです。従って宗教的にもプロテスタントが多いのです。ところが、北の下層階級の方はカトリックが多い。ご承知のように、IRA(Irish Republican Army・アイルランド共和国軍)が、いろんな所で爆弾さわぎを今でも起しております。これは

下層階級の不平分子です。

一方、南の共和国の方は平穏です。ところが、彼らもケルト族の末裔として、反英の民族感情が非常に強いのです。例えば、南の共和国の方でも公式の言語は今だにゲール語なのです。実は、今日ではアイルランド人はゲール語は誰も読めない。九十五パーセントまでが英語しかわからないのです。にも拘らず、例えば駅や道路の標識などでも、京都なら漢字で京都とあるところがゲール語、その下にローマ字でKyotoとあるところが英語で書いてあるのです。ちょうど韓国で道路標識がハングル文字で書かれているように、民族意識が非常に強いのです。

その他に、民族意識を明示しているのにナショナル・カラーとナショナル・フラワーがあります。ナショナル・カラーはグリーンで、どこへ行ってもグリーンを強調しています。例えば、アイルランド航空、という日航に相当するのがありますが、それも外側がグリーンにぬってある。内へ入りますと、スチュアーデスの制服もグリーンです。それからナショナル・フラワー（国の花）はシャムロック（Shamrook）という小型のクローバです。野原へ行きますと、一面にシャムロックが咲いています。また、到るところにこのシャムロックの模様が使われています。アイルランド航空にもその尾部にシャムロックの模様が付いてます。実は今日は、アイルランドで買ったネクタイをしてきましたが、このグリーンがナショナル・カラーで、小さくとんでいるクローバがシャムロックです。とにかく、非常に民族意識が強い国なんです。それはつまり、イギリ

スからの長年の差別に対する反撥なのです。

さて、イェイツも当然アイルランド人として強い愛国心と民族意識を持っています。そこで彼はアイルランドの民族的伝統を文学や演劇の世界で表現しようとしたのです。イェイツは、まず若い時代には神話のなかに自分の夢の世界を求めました。アイルランドは非常に貧しい国です。そういった国の人は夢のような理想郷を求めるのです。で、神話が非常に発達しておりますが、その神話は日本の神話と割合似ているのです。例えば、日本に浦島伝説があって龍宮城へ行き、そこで三年間を過します。イェイツが二十三歳の時に書いた詩「アシーンの放浪」もそれに似ています。英雄アシーンが、ある島へ行って百年間過すのです。その間年をとらない。みんながダンスをしたり、歌をうたったりしている青春の島です。それから第二の島へ行きますが、ここでは巨人と闘います。終日巨人と闘い、夕方になって巨人を海へ投げこみますが、三日後に巨人が蘇り、又闘いがつづく、そういった生活で百年過すのですが、これが人生の壮年の姿です。第三の島では皆眠っているのです。頭にクモの巣をはらして全員が眠っており、それは老人の姿です。そこで百年過したとき、ホームシックにかゝり、四百年目に故国に帰るのです。しかし故国の砂に手を触れたらいかんという誓いを立てさされるのです。ところが浜辺で重い砂袋をかついでいる老人がおり、かわいそうに思って、砂袋を運ぼうとすると、とたんに三百歳の老人になるという、浦島伝説に似た詩ですが、ケルト神話には日本のとよく似ているのがかなりあります。

それからイェイツは中年になりますと、前に申しましたように、現実に目を向けます。当時のアイルランドは動乱の時代で、イギリスに対して一九一六年に反乱を起こしています。ようやく第一次大戦後の一九二二年に独立するのですが、独立の条件について反対派がいるのです。そこで内乱が起こります。そういった騒乱のなかでいったい人間はどういうふうに生きて行ったらいいのか、というようなことが関心の対象になるのです。

それから又、老年になりますと、今度は老人は一体どうして生きたらいいのかということが問題になるのです。人間はだいたい若い頃はロマンチックですが、中年になると現実的になる。老人になると老人の心境になる、そういう変化する人間を歌うのが本当の詩人なのです。ということで、現在では、英米の専門家の間では、イェイツが二十世紀における最大の英詩人だという評価がほぼ定着しております。彼はまた一九二三年には、ノーベル文学賞をもらっております。そのような彼の詩の変遷の経過を辿るのは、非常におもしろい問題ですが、今日はイェイツと日本の関わり合いということに限ってお話をさせていただきたいと思います。

イェイツが日本の芸術の中で最大の影響を受けたのは能です。イェイツは詩だけではなく、劇も二十六篇書いております。しかし、イェイツの劇は詩人の劇なのです。十九世紀後半は所謂リアリズム劇がヨーロッパで盛んになっておりました。その代表的なものはイプセンで、「人形の家」が一八七九年に上演されておりますが、あれは女性問題を扱った劇です。だから「問題劇」

とも言われます。そういった劇は問題を観客に頭で考えてもらうといったような劇なのです。それに対して、イェイツの劇は観客の心情、つまりハートで感じてもらう。人間の宿命とか、そういったものをハートで感じてもらうというふうな劇です。それに題材も現代じゃなく、神話の世界を舞台にしているのが多いのです。アイルランドは、さっきも申しましたように、神話が非常に豊富です。十九世紀の末頃に、アイルランド文芸復興というのがありましたが、これはケルト族の誇る昔の神話をもう一度見直そうという運動です。イェイツはケルト神話の英雄クーフーリンを主人公にして劇を五つ作っております。苦しい現状の中で生き抜き、闘っていくというのが英雄精神でして、それを讃美したものなのです。

次にイェイツの演劇理論としては、一九〇三年に書いた「劇場の革新」があります。その中で彼は次の諸点を主張しています。例えばしぐさよりは台詞が大事だ。しぐさも簡単でなければならぬ。それは目に見える動作でなくて、心の目に見える動作でなくてはならない。台詞も簡単にすることが必要だ。同時にまた舞台装置、背景、衣装なども簡単にしなければならぬ、等々。これは日本の能に非常によく似ていますが、イェイツは当時まだ能を知らず、それから十年経ちました一九一三年に初めて能を知ったのです。そして日本の能が彼の持論に合致しているので、非常に感動したのです。

そこで、一体どうしてイェイツが能を知ったか、ということをお話しましょう。西洋へ能を伝

えた人はまずチェンバレンですが、その後フェノロサがかなり大きな力を発揮しております。フェノロサは明治十年に東大が開設され、その翌年に哲学、社会学の教授として招聘されました。彼はハーバードを出て数年しか経っておらず、まだ二十五歳でしたが、彼は日本へ来ますと、日本の芸術・絵画その他に非常に関心を持つのです。ところで、明治十一年頃といいますと、西洋のものは全部いいけど、日本のものはだめだ、というふうな一般的風潮があって、どんどん日本の美術の傑作が海外へ流れて行きました。それに対して彼は日本の美術を擁護したのですね。

そういう美術関係以外にもいろんなものにフェロノサは関心を持っております。仏教にも関心を持ち、三井寺の法明院で得度しています。その法明院の中に彼のりっぱな墓がありますが、彼の遺言によって骨をそこに埋めたのです。法明院は三井寺の一番北にある塔頭ですが、そこから下を見ると琵琶湖が非常にきれいに見えます。

それから能にも非常に興味を持ちまして、明治十六年から梅若実に弟子入りして、謡を稽古しております。また、能の公演には毎回出席し、観た能の英訳を平田禿木と共にしました。平田禿木は当時東京高師の付属中学校助教諭でしたが、その後三年間の英国留学を経て、東京高師教授となり、つづいて明治三十年三高教授となり、一年半在職しました。この二人の共同作業により英訳された能は五十数篇あります。

その後フェノロサは一九〇八年（明治四十一年）にイギリスからヨーロッパに美術研究のため

に旅行した時に、ロンドンのホテルで風邪をひいて死んだのです。まだ五十五歳。残されたノートがたくさんあり、そのうちまず美術関係については間もなく出版されます。それが〝Epoch of Chinese and Japanese Art〟ですが、これが日本語に訳され、『東亜美術史綱』として出版されました。

ところが、能とか漢詩の英訳といった文学的なものを出してくれる出版社がないのです。しかし、幸い未亡人がロンドンでアメリカ生れの詩人エズラ・パウンドに会いました。このエズラ・パウンドは非常に見識のある人で、一九一〇年代の英詩壇の中心的人物だったのです。そのパウンドを取り巻いて、イマジュト（心象派）という詩人のグループがおりました。心象派というのは、現代英詩を作る契機になったひとつの大きな詩の運動なんです。

と申しますのは、それまでの詩は、ヴィクトリア時代以後、所謂ローマン派の詩なんです。それに対して心象派というのは、心象（イメージ）が大切だと主張したのです。というのは、英詩は昔から歌謡的音楽性を重視し、音楽的であって茫漠たるムードの言葉が詩的なのだと考えました。それに対してパウンドらは、詩というのはイメージを、つまり画家がですね、キャンバスの上に絵の具で絵を描くように、読者が頭の中にひとつの絵が描かれるような詩、それがいいのだと主張したのです。彼らは又新しい技法を求めて、海外の詩をいろいろ研究しました。その時日本の俳句を知ったのです。そして、俳句こそまさにワン・イメージ・ポエムだと考えました。俳

句にもいろいろありますが、蕪村の句はワン・イメージ・ポエムに最も近いのです。例えば、「さみだれや大河を前に家二軒」――これはひとつの日本画なんです。「さみだれ」は日本画では斜めに雨が降っています。「大河」は最上川でしょうが、その川岸に家が二軒、それだけなのです。これに対する説明は何もない。ただひとつの絵なのです。ところが英詩だと、そうはいかないんです。例えば、アメリカの詩人エミリ・ディキンスンに「ストーム」(嵐)という詩があります。嵐に吹かれている家が一軒、これが人生の嵐の中でただ一人頑張っている人間の象徴なのです。ところで、私は明治時代の正岡子規はえらいと思うんです。正岡子規の俳論、歌論は非常に優れたものです。子規は蕪村を非常に高く評価しています。つまり、蕪村には理屈がない、絵、すなわちイメージだけなのです。一方、子規が非常に悪く言ってるのは、加賀千代で、「朝顔につるべ取られてもらい水」というのは理屈です。つるべに巻きついた朝顔を切るのが可哀そうだ、という女の俳人の気持がよく表われているということで、実は江戸時代には評判が高かったのです。が、子規はこれは理屈だと言うのです。ともかく子規は見識が非常に高く、イマジズムの理論とも似ているのです。パウンドも詩の思想性や音楽性を排し、俳句を理想にしたのです。

さて、パウンド自身も俳句を真似た詩を書いているんです。一九一一年ですが、彼はパリの地下鉄「メトロ」に乗っておりまして、コンコルドの駅でプラットホームへ出ようとしました。すると、プラットホームに沢山人が居るのですが、その中に、フランス美人の白いきれいな顔が、

三つ四つパーッと見え、きれいだなと思いました。この印象を何とかして表わしたいと思って、家に帰って一ページ位の詩を書きました。しかし、あの強烈な印象がちっとも出ていないのです。それから半年経ってこれを半分に縮少したが、まだ駄目でした。その時にふっと日本の俳句を思い出し、次のような二行の詩を作りました。

The apparition of these faces in the crowd ·
Petals on a wet black bough

群衆の中に亡霊のような顔、顔、顔。
濡れた黒い樹枝にくっついた花びら。

今と違って、一九一〇年頃のメトロはまだ暗いのです。その暗いプラットホームにフランス美人の白い顔が亡霊のように見えたのです。それが濡れた黒い樹枝にくっついた花びらのようだと、その印象をイメージで述べているのです。従って、この詩は短詩というだけでなく、イメージによる適確な描写という点が俳句的なのです。かつて「俳句第二芸術論」がありましたが、実は、俳句は海外へも影響を与えているのです。

こういうふうに、パウンドは俳句に理解を持っていたのですが、その彼がフェノロサの遺稿の能の英訳を見た途端にすごく感激したのです。そしてこれはギリシャ劇以後の最高の劇だと言いました。そして、その中の一つ「錦木」を、フェノロサの訳に、パウンドは自分流に筆を入れて、

非常にきれいな韻文にして、それを雑誌に発表したのです。

次にそのパウンドとイェイツの関係ですが、歳は二十歳パウンドの方がイェイツより若いのです。一九一三年頃から、イェイツは大体身体が弱いので、冬になりますと、ロンドンの寒さはつらいので、サセックスという南の田舎の別荘にいき、冬の数か月はそこで過しましたが、その間パウンドが秘書として同居しておったのです。ちょうどその頃にパウンドがフェノロサの原稿をもらったのですから、当然それをイェイツも全部読んでおります。そしてイェイツ自身も非常に感激したのです。

一九一六年になりますが、「日本のある高貴な劇」(Certain Noble Plays of Japan) という本が出ました。これはフェノロサ、パウンド訳の能数篇を集めたものでして、そこにイェイツがかなり長文の序文を書いております。この本は今なかなか貴重本で、外国の大学へ行きましても、貴重本のライブラリーに入っています。それに付けたイェイツの序文が、能に対して非常に理解のある見解を示しております。能のクライマックスには舞踊があるが、それは地獄の中の亡霊の苦しみなどを舞踊によって表現しているのだ。ところが、その舞踊というのは、腰から上は全然動かさないで、真直ぐスーッと滑るようにして歩く、つまり、能の舞踊は肉体のダンスでなく、精神が踊るのだ、と述べています。

それから能の中には神や霊が出て来る。これはアイルランドの神話と非常によく似ている。日

本人は大自然、聖なる水や、滝とか、大きな樹に対して恐れを抱いている、というような事も書いております。ところが、実は、イェイツ自身は能を一度も観ていないのです。

その後イェイツは、能を真似た劇を書き、一九一六年に、第一作を上演しました。「鷹の井にて」(At the Hauk's Well) です。これは背景は模様のある幕だけです。そして舞台の上には鷹の守る井戸を表わす四角な青色の布があるだけなんです。この井戸に不老不死の水が出てくる。それを飲めば人間は不老不死になる。これは日本の「養老」の話に似ていますが、アイルランドにも、「コンラの魔法の井戸」というのがあり、そこでは不老不死の水が出るのです。

それから、能ですと囃子方が背後に、横の方には地謡が坐ります。それをイェイツは一緒にし、もっと簡略化し、楽師として三人。それぞれ太鼓・ドラにツィターという弦楽器を持ち、それを弾きながら、地謡のように語るのです。そして能と同じように情景描写と俳優の心境を語るのです。

開幕すると、まず楽師が出て、その情景を語ります。ずっと前に水源を断たれた干上った井戸や、風にもがれた樹の枝を、心の目に呼び起すと語るのです。心の目とは想像力、イマジネーションです。だから、これは観客の皆さんにどうかこういう光景を想い起して下さいというのです。干上がった井戸や、葉のもがれた樹は生命の源である水や樹の枯死を象徴します。この世界というのは、そういったような、水も出ないし、樹も枯れている状況だということを、まず観客に想

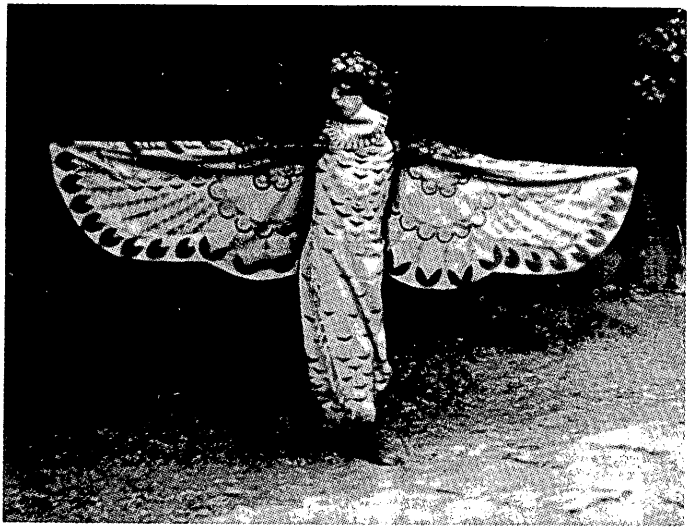
像してもらうのです。

それからその次は登場人物の紹介です。高貴で伸びやかな物腰、塩辛い海風に吹かれ、裸になった崖を登って行く一人の若者、これは北の国の王子なのです。彼はその不老不死の泉のことを聞き、海を渡ってやって来たのです。もう一人の登場人物は老人です。この老人は井戸の傍でじっと水の出を待っているのです。ところが、水が出てきた時にはいつもうたた寝している。そうして五十年間井戸の傍に坐りつづけているのです。それから、楽師が情景描写をします。老人は木の葉を集めて小さい山を作る。その葉の上に枯枝を置く。寒さに震えながら火起し棒を取り出し、それを回転させて火をつける。すると火花が出て、枯枝に火がついた、さあ火は燃え上って輝いている。と、楽師が語ると、老人はジェスチャーのみをするのです。

それから若者と老人との対話が続くのですが、劇の最後にもう一人の登場人物が出ます。井戸のそばに最初からマントをかぶって一人の女がうずくまっていますが、彼女は不老不死の水の出る井戸を守るために魔女が遣わしたその手先きなのです。だから人間じゃない。彼女は一言もしゃべらない。それがスーッと立ち上りまして、踊り出すんです。実はこれは何のために踊ったのか、よく読んでもわからない。外国の学者でももう一つ意味がわからんのです。ところが舞踊をイェイツは非常に重要視するんです。そこで、その鷹の踊りをやってくれる人がないかと、探していたとき、ちょうど舞踊家の伊藤道郎がロンドンに来ておったんです。

彼は十九歳の時に日本を出まして、三年間ヨーロッパ各地で舞踊の勉強をしておったのです。そしてロンドンでも上演してるのです。これは日本の舞踊を真似た、烏帽子に袴をつけた踊りでした。それをエズラ・パウンドが見に来ておったのです。そしてパウンドが「実は今イェイツが日本の能を真似た劇を作ろうとしているから、ぜひ一遍イェイツに会ってくれ」と言ったのです。ところが伊藤道郎は、子供の時に叔父に度々、能に連れて行かれたが、あんな退屈なものはない、能には興味がないと言ったのです。しかし、パウンドは、能はギリシャ劇以後、最高の劇なんだと言いました。それで、伊藤道郎も多少興味を持ち、イェイツに会ったのです。イェイツは彼に鷹の踊りをぜひやって欲しいと言いましたが、いったい鷹がどういう踊りをやるのか、伊藤道郎はぜんぜん知らないのです。そこで、彼はロンドンのズーという大きな動物園に行きまして、鷹を三日間観察したのです。そして、初演のとき鷹の踊りをやったのです。

さて、「鷹の井にて」は能の形式を借りた一種の実験劇でして、価値としては余り高くないし、その後も西洋では余り上演されないのです。ところが、この劇は、不思議と日本では度々上演されるのです。翻訳も既に、大正九年に平田禿木の訳が出ております。それから日本語の上演もあります。昭和五十二年に東京で二晩公演しております。その最初の晩に私も行ったんですが、皇太子妃、今の皇后が来ておられました。美智子さんは、アイルランド文学が非常にお好きなんだそうです。それから半年経って翌五十三年三月、京都の府立文化芸術会館で、二晩公演しました。



伊藤道郎『鷹の踊』

「アイルランドの夕べ」として、第一部が「鷹の井」で、四十五分位かかります。第二部の前半が、イェイツの詩の朗読です。私の訳で四篇、小池朝雄氏が朗読しました。後半はアイリッシュハープの演奏です。それから原語では、大学のＥＳＳなどでよくやります。また、京阪神に「能法劇団」と言うのがあります。能に関心を持つ外人がここでも何回か原語で上演しています。

ところが、この劇をもう一遍能に還元して上演するという試みが、かなり古くからあるのです。一番最初は、昭和十四年に「鷹の井」という題で上演、それから戦後の昭和二十四年には「鷹の泉」という題でした。これは完全に能ですから、後ろは囃子方、横は地謡になるんです。イェイツは、それを三人の

イェイツ『鷹　姫』

楽師にしてしまいましたが、それを元の様に戻したのです。シテ、シテツレ、ワキなどが出て来るわけです。昭和四十三年に今度は「鷹姫」という題で、京都の観世会館で上演しました。これは、ちょっと変ってまして、地謡を八人、舞台の上に、舞台の正面に面して、全部坐らせるのです。そして、一斉に謡いますと音楽効果がある。そういう新しい演出方法でやりました。昭和六十三年十二月にも大阪の大槻能楽堂でこの形式で上演しております。

ところが、能に還元された「鷹の井」は、実はそのモチーフが原作と違うんです。つまり、老人の不老不死に対する執拗な執念が中心テーマとなっているのです。能のモチーフの一つは「執念」という仏教の業なのです。それで老人の執念のすさまじさという点に焦点を合せているのです。

その他に、イェイツは能を真似た劇を三つ作っております。その三番目の劇が「骨の夢」という題なんです。これは、先程申し上げました能の「錦木」に非常によく似ているというより、「錦木」をそのままとってるんです。「錦木」では登場人物が男女の亡霊で、男が毎晩女の所へ通うが、女は門を閉じて入れないので、男は錦木を門の前に立てて帰るのです。それが実に千日間続いたのです。そのうちに、男女が死にまして、女は心のつれなさ、男は恋の執念の為に極楽へ行けず、亡霊になりまして国の果て陸奥をさまようのです。そのとき、旅の僧に会って、今までの話をするのです。そして、最後には、僧侶が二人の為に読経をしてくれる。それによって二人の魂が救われて極楽に入るという筋ですが、情景などは非常にきれいな詩的な能です。

イェイツは、それをそのままアイルランドに持ってきたのです。亡霊の男女は、十二世紀にアイルランドをイギリスに売り渡す、その手引をした二人の男女です。その罪の故に、それから七百年間、アイルランドの荒野を真夜中に、彼らの亡霊がさまよい続けている、という伝説がアイルランドにあるのです。

そして、「錦木」のワキ役の僧侶に相当するのが、一九一六年の反英蜂起に加わった愛国者でして、彼が故郷のアラン島に帰る途中、真夜中山の中で亡霊の男女と出会うのです。そのとき、亡霊が愛国者に、私達の罪を許すと、一言おっしゃって頂いたら、私達は許されて天国に行く事が出来るのです、と懇願するんです。ところが、愛国者は、「絶対許さぬ」と、三度言います。

そこで、亡霊は遂に諦めて、トボトボと果て知れぬ放浪の旅にまた就くのです。そのあたりは、アイルランド西部のBurren地方という非常に荒涼たる土地です。そこには昔の僧院の廃墟がありまして、いかにも亡霊の出そうなところです。アイルランドには、そういう古い僧院もあり、お城もあり、なかなかおもしろい所です。

ところで、イェイツの劇が「錦木」と違うのは、「錦木」の方は僧侶によって救われるのです。ところが、イェイツの劇では絶対に救われない。というのは、イェイツは、人生は悲劇だ、それに対して救いはないと考えるのです。その点、日本の能とは根本的に違っているのです。

実は数年前に、アイルランドのヒラリー大統領が日本を訪れています。その時に、イェイツが日本の能から大きな影響を受けたという事を語り、自分も是非能を見たいと言いました。大統領ですから国賓です。だから、なかなか簡単には行かれないでしょうが、ちゃんと能を日本で観て帰りました。

それから、現天皇・皇后も、皇太子時代にアイルランドを訪問された時、イェイツが狂言を真似て作った劇「猫と月」を御覧になりました。イェイツはアイルランドの国民詩人ですから、彼を通じてアイルランドの人びとは、能、その他日本そのものに親近感と好意を持っているのです。アイルランド人は、前に申しましたように、イギリスは昔から嫌いなのです。ところが、遙か離れた日本に対しては、むしろ非常に親日的なのです。私も一昨年、はからずも、ダブリン大学ト

リニティ・カレッジから名誉文学博士号をもらったのですが、これなんかも、やっぱり日本人に対する親密感がつのって来ているという事の一つの表れだろうと思うのです。

最後に一つだけお話して置きたい事があります。実は、阪倉篤太郎先生がイェイツの前で謡曲を謡われたという話があります。それを、かなり前に聞いておりまして、昭和三十年代だったと思いますが、早稲田の尾島庄太郎教授と一緒に阪倉先生のお宅へ行ったのです。そのとき、先生はスクラップ・ブックを持って来て、説明されました。しかし、その時は、私は気軽に聞き流しておりまして、何を謡われたのか、又その時のイェイツの反応はどうだったのか、全く記憶に残ってないのです。ところが、割合近年になって、その事がはっきりすることになったのです。

と申しますのは、矢野峰人さんが、「片影」という本を昭和六年に出しておられるのです。これは、十五人の英国の文学者に会われた時の印象を記した二百数十頁に亘る本なんですが、昭和六年出版ですから、絶版でなかなか手に入らない。ところが、ある人がゼロックスで全部コピーを取ってくれたのです。それを見ますと、イェイツの所が一番最初で六十数頁、その中で矢野さんは次のように書いておられるのです――「ダブリンのイェイツの家で過した日夜は、いずれも私にとって忘れ難いものだが、今尚ありゝゝと記憶に残るのは、十月一日、金曜日の夜の集いであった。」この十月一日というのは、前後を調べますと、一九二七年（昭和二年）なんです。それから続いて、「その日の夕暮、私はスコットランドから渡って来たS氏を自分の宿に迎えてい

た。S氏は私にとっては国文学の師たりし人、歌謡・演劇に詳しく、特に謡曲に於ては一家をなせる人である。……私は氏からダブリン訪問の通知を受けると同時に、イェイツに氏のことを詳しく告げ、源氏物語のオーソリティであり、能のオーソリティであるこの日本文学教授に会って、これらイェイツの愛する文芸について、first-hand information を受けるように薦めておいた。イェイツはこの国文学教授の来訪に多大な興味を感じ、同氏が来たら是非自宅に同道してくれと言った」と矢野さんは書いています。

そこで、その日の午後八時半頃に、イェイツの家へ矢野さんが阪倉先生を連れて行ったのです。そうすると、「わざわざ連れて来てくれと言っただけに、S氏に対するイェイツの態度は、丁重そのものであった」とあります。そのとき、イェイツは、先ず能楽発達の歴史、能楽界の現状を質問する。又、能面を三つ取り出して、その説明をS氏に求める。そういう風にして、話が進んでいるうちに、一群の男女が訪れた。これは新進詩人・俳優であった。イェイツは、今 noble play（能のことをイェイツはそう呼んでいた）について語っていたところなのだという。そして彼らに能面を見せると、彼らは wonderful という。次に話が民謡や謡曲の節廻しになり、そのうちに「だれからともなく、S氏に対し、謡曲の一くさりを是非聞かせて欲しいと言った。S氏は多少躊躇していたが、やがて音吐朗々、謡い始めたのが「松風」の一節であった。イェイツは非常に熱心に聞いていた。」謡い終るのを待ち、矢野さんばイェイツに、「monotonous と思われ

たんじゃありませんか」と聞くと、イェイツは〝no, no, not at all.〟と強く打ち消した。それから、彼はこの悲しげなメロディは、一体どういう意味なのかと尋ねた。「S氏が、松風村雨の故事を語ると、イェイツは如何にも感に堪えないものの如く、深くうなづいた」と、「片影」の中で矢野さんが書いておられるのです。

さて、この本の中では、終始S氏となっていますが、勿論阪倉先生です。実は、この「片影」をゼロックスで取ってもらったとき、幸いに巻末に矢野さんから阪倉先生に当てた自筆の手紙が添えてあり、それもコピーされていたのです。この手紙は達筆で、ちょっと読みづらい所もあるんですが、この中には、「拙著、すでにお手元に届きました由にて、ご丁重なる礼状に接し、恐縮に存じます……書中イェイツ訪問のくだりは、二日に亘る分を、都合で一夜の光景に書き改めました」とあり、そして、終いの所では「九月十八日、矢野禾積、阪倉先生机下」とあります。この本は昭和六年九月十日発行ですから、出版されますとすぐに、阪倉先生の所へ送ったわけです。すると、すぐに阪倉先生が矢野さんの方に礼状を出され、それに対して、この手紙が書かれているのです。ご静聴ありがとうございました。

追記――阪倉篤太郎先生が「京都女子専門学校校友会雑誌、昭和三年三月号」に書かれた「外遊漫録」を最近発見しましたので、補足します。その第二章が「詩人イェイツ訪問記」でして、その中で次の

ように書いておられます。

「ダブリン市に滞在中の四日間に二度イェイツを訪ふ機会を得た。第一回は九月三十日英蘭のホーリーヘッド岬から汽船でセント・ジョージ海峡を越えて、夕方やっとこの市のスタンダアド・ホテルに旅装を解いたその夜のことで、夕食をすますとすぐに矢野峰人君に伴はれて氏の邸をおとづれたのだが、初対面の瞬間から愛蘭自由国元老院議員といふ厳めしい感じは少しも起らないどころか、齢耳順を過ぎてなほ若々しい情熱の胸に燃える抒情詩人の、丈高い容姿と素撲な態度とに親しみの念を懐かせられた。……やがて峰人君からわたしが謡曲を嗜むことを聞き知った氏は、よい折だからこの席でその一節だけでも聞かせてほしいと望むので、わたしは憶面もなく「松風」のロンギを謡った。……かうして一見旧知の如くうちとけた氏の歓待に、わたしは旅の疲れをも忘れてくつろいだ楽しい気分にひたってゐたが、十一時も過ぎたのであまり長居をしてはとやっと「さよなら」の挨拶をすると、氏はわざ〳〵二階の客間から玄関までおりて来て廊下に掲げられた舞台面や衣装の図案などについての説明を与へて後、外套をさへ着せかけて「それではまた」と送り出してくれた。わたしは此夜の感激を回想する度に今でも胸の踊るのを覚える。」

第二回の訪問は四日後の十月三日であったが、その時の話題の中心は「源氏物語」であったので、その詳細は省略します。

（京都大学名誉教授）